

しちくほうかつ

発行 京都市紫竹地域包括支援センター TEL 495-6638
発行日 2014年7月20日

内容

- ・「大切な人を送ること、天国に行くこと」のおはなし ……1・2
- ・長寿の方のお言葉～まだまだ青春 ……2
- ・ここにこの人あり 地域世話役さん登場 ……3・4
- ・肩たたきー大切な命を救いますー大澤医院 ……4
- ・日常生活圏域居宅支援事業所・サービス事業所の取組 5・6
- ・ひろがっています!まちのつどいの場 ……5
- ・初夏の体調管理 北区地域介護予防センター ……7
- ・職員紹介「私の夏」 ……8

『大切な人を送ること、天国に行くこと』のおはなし



平成5月にTさんとMさんを囲んで和やかに「おはなしの会」が行なわれました。

養護学校の先生、介護職、病院職員、在宅医療職等TさんとMさんに関わった人たちが集まりました。「大切な人を送ること、天国に行くこと」をテーマとしてTさんとMさんのお話をご紹介させていただきたいと思っています。

Tさんのおはなし

Tさんは障がいをもった娘さんを一人で育て、看護してきました。娘さんは19歳の時天国に行きました。そしてTさん自身も現在がんのターミナルステージにありますが娘さんを送ったこと、今を生きることそしてこれから天国に行くことについてお話してくださいました。

Tさんの宝物

娘は健常で生まれて生後まもなく無菌性髄膜炎で障がい児となりました。私は娘の入院中に痰の吸引や鼻から管を胃に入れる経管栄養も全部覚えました。在宅では往診や訪問看護、訪問歯科などお世話になっていました。娘は訪問学級の授業を受けていて、先生手作りの手袋の指人形を使って読み聞かせて下さる「てぶくろ」のお話が大好きで毎回集中して聴いていました。当時中学までしかなかった訪問学級は養護学校の先生方の努力で高等部でも訪問して頂けるようになりました。

娘は20歳の目前で逝きました。気づいた時には全身真っ白で救急車を呼びましたが駄目でした。もっと早くに気づいてあげれば良かったと思うと同時に、20歳の目前だったので子どものままで逝ってくれたのかなとそんな風にも思いました。娘が亡くなって火葬までの3日間、娘と2人きりで過ごしました。娘の体を抱えた時、思っていた以上の体重に、この子はこの子なりに成長生きてきたその重みなのだと改めて感じました。

Tさんご自身が病気になってからの選択

娘が亡くなってからの2年間は自宅に閉じこもり、どのように生活していたのかほとんど記憶がありません。ようやく気持ちに力が戻ってきたころ、体の異変に気づきました。極度の貧血や下血で通院もしていましたが緊急手術で、大腸癌が腹部やリンパ節に広がっていることがわかりました。



た。抗がん剤治療は断りました。やっと娘に会えると思ったからです。私は今、病気と闘ってはいません。娘と過ごした家で最期を迎えたいと思っています。でも

体が弱ったら自分の力だけで生きていく事は出来ません。夜中に何度も人を呼ぶような状況になればホスピスで最期を迎えたいと考えています。

Tさんからのメッセージ

私はこれから弱っていくことや、死への恐怖は一切ありません。他の人には当てはまらないかもしれませんが。家族がいれば一分一秒でも長く生きたいと願う人もいるでしょう。私は最期まで私らしく生きていく自信があります。私は自分で自分を看取りたいと思います。でも、体が弱って倒れそうになった時にはそっと手を差し伸べてください。そんな時には側にいてください。みなさんの力を貸してください。よろしくお願いします。

Mさんのおはなし

Mさんは、5年前に脳梗塞で倒れたお母様をお父様と地域の在宅チームのメンバーと共に愛情を注ぎながら支えてこられました。今年、お父様が脳梗塞や肺炎で急変され、そのあとを追うようにお母様も天国に行かれました。Mさんは在宅介護チームへの感謝と幸せを感じながら、介護生活が送れる人が増えるようにと、悲しみの中お話しくださいました。

家に連れて帰ろう

家に帰りたと言っていた母を連れて帰ろう・・・